

危機の時代を生きる

長期化する新型コロナのパンデミック(世界的大流行)を、どの様に捉えればいいのでしょうか。小児科医として少し感染症に関係する立場からお話したいと思います。

今後の見通しについて申し上げます、まず収束とは、人口の一定数が免疫を持った時に迎えるものです。その一定数とは、6割程度だと言われています。

収束までの道程をフルマラソンに例えれば、現在は10^{km}地点を走っています。

子どもは感染率が低く、重症化しにくいなど、ウイルスの特徴が少しずつ分かってきたことは大きな前進です。また、ワクチンの開発も進んでいます。一方で、流行の地域差の原因など、分からないことはまだ多くあります。

このマラソンは、100^{km}を一生懸命に走るような短距離走ではありません。

1年、2年という長い時間を要するという覚悟を持って、長距離走の走り方をしていくことが重要だと思います。そして、歴史から見てパンデミックは必ず終わります。

長い時間はかかりますが、必ず終わるという認識を持つことは大切です。

離れて生息していた野生動物が人間社会に入り、これまでその動物を宿主として共生してウイルスが、新たな宿主として人間を選び、人間との共生がうまくいかない状況が現在だと認識しています。

そうであれば、ウイルスが時間をかけて、できるだけ穏やかに変異しながら、重い病気を起こさないよう弱毒化することは、お互いにとってメリットがあります。

そのためどうするかを、考えていくことが賢明であります。

私たちが取るべき対策はおのずと見えてきます。人間も自然の一部ですから「一人勝ち」ということは考えられません。心地よいものではありませんが、「共生」の道を探っていくべきでしょう。

多くの人は共生を、難しいと感じるでしょう。感染によって亡くなる人がたくさんいます。

個々の遺族にとっては、とても許容出来るものではありません。

一方で、ウイルスをせん滅させると、誰も免疫を持っていない状況が生まれ、万が一、そのウイルスが再び人の社会に入ってきた時には、もっとひどい影響を与えることになります。

そう考えると、せん滅するよりも、共生していくことが利点となります。

ちょうど、季節性インフルエンザのように穏やかなウイルスになるのを期待します。

ワクチンは期待が持てます。そして、新型コロナウイルスの抗ウイルス薬も出来るでしょう。

個人にあっては、「一人勝ちはできない」という意味で、自分だけの心地よさを追い求める生き方から、他者にも配慮する生き方への転換が求められます。

思いやりの精神、まさにロータリーの神髄です。